会議録

会　議　名		平成２９年度第２回青少年問題協議会専門委員会	
事　務　局 （担 当 課）		児童青少年課	
開 催 日 時		平成２９年１１月２８日（火）午前１０時１５分～１１時４５分	
開 催 場 所		小金井市市役所第２庁舎８０１会議室	
出席者	委　　員	高橋委員長、佐野委員、黒須委員、大澤委員、櫻井委員、古源委員、小山委員、羽田委員	
	そ の 他	欠席：冨士道専門副委員長、田原委員、倉持委員	
	事 務 局	伏見児童青少年課長、田中児童青少年係長	
傍聴の可否	可	傍　聴　者　数	０人
傍聴の不可・一部不可の場合はその理由			
会 議 次 第		１　開　　会 ２　議　　題 ⑴　専門委員会による調査、協議のテーマについて ⑵　その他 ３　閉　　会	
会議結果		○　今期の専門委員会による調査、協議のテーマ案は「子どもの居場所」とする。なお、合わせて意見の多かった「子どもの夢」（主体性や自己決定、子どもと大人の関係）、「ＳＮＳ等への依存」については、アンケートの設問中に一部含めることで対応する。 ○　アンケートは、市内公立小・中学校２校において、児童（小学４～６年生）・生徒（中学１～３年生）とその保護者を対象に、各学年１クラスを抽出して実施する。（前回よりも１学年対象を増やす） ○　次回の専門委員会までに本日の委員の発言を元に事務局でアンケートのたたき台（案）を作成し、次回の会議（平成３０年２月２日開催予定）での専門委員会案の完成を目指す。	
提 出 資 料		平成２９度第２回小金井市青少年問題協議会専門委員会　次第	
その他配付物		資料　前回、提案されたテーマとアンケート手法について	
伏見児童青少年課長		おはようございます。児童青少年課長、伏見でございます。よろしくお願いいたします。本日は、お忙しい中、青少年問題協議会の専門委員会のほうにお集まりいただき、ありがとうございます。本日、倉持委員並びに富士道委員、田原委員よりご欠席のご連絡をいただいております。それでは初めに、事務局のほうから資料の確認をさせていただきます。	

田中児童青少年係長	おはようございます。児童青少年係、田中です。よろしくお願いいたします。議題に入ります前に、本日の配付物の確認をさせていただきます。次第書１部のみ、でございます。よろしくお願いいたします。
伏見児童青少年課長	それでは、今回は、前回に引き続き、調査、協議のテーマについて、でございます。委員長、よろしくお願いいたします。
高橋委員長	おはようございます。第２回専門委員会ということで、よろしくお願いいたします。本日の協議の内容ですが、前回、皆さんに、まず、研究のテーマを何にしようかということで話をさせていただきました。そのテーマの中で３つ出てきたと思います。まず１つ目が、子どもの居場所の問題、２つ目が子どもの夢、主体性や自己決定、子どもと大人の関係です。それから３つ目がＳＮＳ等の依存に関する啓発であったかと思います。この中から、アンケートをどう行い、どのように織り込んでいくのか。また、そのアンケートの問いたい内容、具体的な質問等を含めて、総合的に今日議論をしていく、ということになります。 今日の目的ですが、まず初めにテーマを一つに集約したいと思います。先ほどの３つの中からどれにするかということで集約をしたいと思います。その決まったテーマについて、今度は、そのテーマについて聞きたいアンケート項目、それから、最終的には成果物ということでリーフレットをつくることになりますので、リーフレットで展開をどうしていくかなど、ご自由にご発言をいただければと考えております。よろしいでしょうか。はい。ありがとうございます。 では、前回からちょっと月日がたっておりますが、まず、その３つのテーマについて、皆さん、それぞれ考えてきていただいたことと思いますので、お一人ずつご意見を頂戴できればと思います。では、小山委員から、よろしいですか。
小山委員	前回、佐野委員の夢という話を聞いたり、自己実現とか、主体性とか、自己決定とかという話をさせていただいたと思うんですが、権利条例にある自分らしく生きる権利、子ども自身がどう主体的に自分らしく生きていくかについて、いろんな制約とか、あるいは意に反して自由にできないような環境にあるといったようなこともある。そこを子どもがその成長過程の中でどうしていくか、自分らしく生きていくか、ということについて、何かいろんな支援とか、状況整備とかをしていかなければならないんじゃないかと思っておりまして、ちょっとその辺について気になっております。
高橋委員長	ありがとうございます。古源委員、どうですか。
古源委員	古源です。私も前回１番目の子どもの居場所のことか、２番目の夢・自己実現ということがいいんじゃないか、というふうに発言したという記憶しております。そんな中で考えてきたのは、最近、小学校低学年の授業時間が増えてきて、放課後の時間も短くなってきていると思うんです。そんな中で、地域で子どもの姿が見えないということをよく耳にします。 その短い放課後の時間をどこでどんなふうに過ごしているんだろうというふうなことがございます。小学校は放課後子ども教室とか、そういったところがあるでしょうし、中学生はもう部活か、塾に通うといったような過ごし方をしている

	と思うんですけれども、水曜日、小学校が早く終わる日に、意外に自転車で連れ立って移動している子どもを見るんですね。でも、どこに行くんだろうって思ったりしております。 　小学生のお子さんの意見を聞くと、放課後に自由に集まれる場所がないよという話が出ます。児童館もありますけど、児童館は市内に４館しかありませんので、どうしても児童館が遠かったりすると行けない。ボール遊びをしたくても、ほとんどの公園でボール遊びは禁止ですので、遊ぶ場所がない。確かに放課後子ども教室は各学校で展開していますけれども、そういう何々教室というのではない、子どもが自由に集まって仲間で好きな内容で遊ぶ場所、というのがなくなっているのでは、と思いますし、そういう意見を保護者から聞くこともあります。 　例えば公民館のロビーに子どもたちがよく集っているという姿がありますね。公民館のお年寄りの居場所が、夕方になると子どもで占領されちゃうという姿がよく目にされるということですけれども、その意味で、今、短くなっているけれども、子どもたちが放課後はどんなふうに過ごしていて、ほんとうはどんなことをしたいのか、子どもがどう思っているのか、また、保護者が子どもにどこで遊んでいてくれたら安心なのか。そして、現実にはどこで集まることができるのかというようなことを、こういう大きな調査ですので、聞けたらいいのかなと思っています。 　それと、もう一つは、中学生に関しては、中学生に場所が必要なのかという議論もあるとは思うんです。部活をしているお子さんにとっては、暗くなってからお家に帰るような状態だとは思います。 ただ、一つの例ですが、東小学校の区域なんですけれども、隣接する東児童館で毎週１回水曜日に中高生タイムというのを１８時から２０時までやっているんです。そこに中学生、高校生が自由に集まってきて、集まった子どもで活動するという時間があるんです。これを始めたときには、中学生が集まることで、何かトラブルがあったら困るというような意見もあったんですけれども、もう随分長いこと、これを続けていまして、自主的な活動をずうっと続けていて、中高生が自分たちで楽しむことであったり、あとは児童館に来る子どもに対してのボランティア活動であったり、そういったことを展開しています。そういう形でいろんな過ごし方があるので、そういったことを含めて、何を欲していて、私たちがどんな形で設定してあげられるのか、ということや、今の子どもたちが不満を持っていないのか、というようなことを調べていけたらいいかなと思っています。以上です。
高橋委員長	ありがとうございました。続きまして、羽田委員、お願いします。
羽田委員	保護観察の経験からしますと、最近の子は、高校生の大学受験などで、大学は絞れるんだけども、学部が絞れない。将来何したいが決められない子が確実に増えている感じはします。 　それから、知り合いの小学校の先生に聞いた話ですが、作文を書かせると、お母さん、お父さんなどのテーマであれば、みんな書けるけれども、将来の夢や将

	来何になりたいの、というテーマで書かせると、書ける子と書けない子が完全に二極化し、書けない子が確実に増えているそうです。そのような理由で、真ん中の夢・自己実現がテーマとしてはいいのかなと思います。以上です。
高橋委員長	ありがとうございます。では、そちらのほうで、すいません。櫻井委員、お願いします。
櫻井委員	櫻井です。私もこの３つの中で最初の子どもの居場所がいいのではないかと思います。最近のお子さんは、地域とのかかわりが少ないんです。青少年健全育成で行事を春と秋にやらせていただいているんですが、そのときは小学生が数百人も集まるんです。それで、こんなに地域にお子さんがいらっしゃるんだ、と思うのですけれど、普段は放課後、見かけないんですね。確かに今、塾とか、習い事をいっぱいやっていますから、地域にいる時間が少ないのかなと思いますが、それだと親も子どもとの接触が今、ちょっと少なくなっているんじゃないかなと思います。多くのお母様たちがお仕事をなさっていて、子どもが小学校から帰ってきたあとは塾に行かせているから、自分は５時、６時まで平気みたいな感じのお母様が多いように思いますので、かかわりを持つということに関して、居場所というのがテーマとしていいかなと思います。以上です。
高橋委員長	ありがとうございました。では、大澤委員、よろしくお願いします。
大澤委員	大澤です。私は、前回ＳＮＳを取り上げたらどうかというふうにお伝えしたんですけれども、やはりニュースとかを見ていても、ＬＩＮＥなどの問題がたくさんあって、子どもたちが実際に誰とつながっているのかというのを親自体が把握できていないと思うんですね。アンケートの中でちょっと子どもと問答することによって、少しでも子どもが今、どういう状態で、ＳＮＳを使っているのか、いじめられていたり、何か逆にちょっと嫌なことをほかの人に言ってないか、見つけられる場になったらいいんじゃないかと思いました。以上です。
高橋委員長	見つけられるような場というのは、居場所という意味ではないですね。
大澤委員	親との関係の中で少しでも、あ、うちの子、ちょっともしかしたら、こんなことしてたのね、みたいな感じで、多分忙しくってそんなにじっくり話し合う機会もないと思うんですよ。そんな中でこのアンケートで、例えば今、こういうふうに聞かれているけど、どう、とかと言って、うちの子、思っていた以上にちゃんとＳＮＳを利用できているんだなとか、あれ、もしかしたら、ちょっと指導しないといけないかもしれないなっていうふうに、ちょっと気がついたりとか、そういう話し合いの場みたいになったらいいんじゃないかなっていう意味です。すみません。
高橋委員長	わかりました。ありがとうございます。では、続きまして、黒須委員、お願いします。
黒須委員	緑中の放課後カフェでは、中学生が５０人から多いときは１００人、クラスの何人かで来たり、友達同士で来たり、部活終わりに学年関係なく一緒に来たりして、短時間で帰っちゃう子もいますし、トランプゲームをやったりする子もいま

	す。何かそういうのを見ていて本当にいいなと思います。 　小金井市の放課後子どもプランの、一小の放課後子ども教室の事業目的の記載で、子どもたちが親や先生以外の信頼できる大人に出会う機会を提供する。また、大人が我が子以外の子どもたちに関心を持ち、また、多くの子どもとかかわることによって、客観的に我が子を見る視点を得る。保護者には多くの大人に見守られ子どもたちが育っているという安心感を持ってもらう。子どもが困ったときに知っている地域の大人に相談したり、また、地域の方も町中で気になる子どもを見かけたときに気にかけるようになった、というのがあるんですけど、この子ども、中学生とのかかわりっていうのは、私も健全育成で地区行事をやるときに中学生ボランティアの担当をして、中学生が十何人とか来てくれて、ほんとうに小さいときの子供会でかかわった子と、そこで何年かぶりに会ったりとか、いろいろな中学生と知り合う機会が増えたので、放課後というのは、小学生だけじゃなく中学生にも必要だと思っています。 　先ほどの東児童館みたいに、児童館でそういうことができるところはいいんですけど、地域によって、例えば緑児童館は周囲の環境とか、いろいろあるみたいで、５時半には閉めなきゃいけないので、その地域によって中学生、高校生の対応はいろいろあると思うんですけれども、小学生だけじゃなくて、中学生とか、高校生にも場が必要と思っているので、この子どもの居場所づくりがいいかなと思います。 　それと、関連して、やっぱり放課後の時間の使い方ということで、インターネット、先ほどのＳＮＳの使い方もあります。部活とかやっていない子、帰宅部の子たちでも、ネットの世界で誰かとかかわってみたい感じがあると思うので、何かそこを絡めて調査するというのもいいかなと思いました。
高橋委員長	ありがとうございました。じゃあ、佐野委員、お願いします。
佐野委員	３つから選ぶというのは非常に難しくて、みんなそれなりにそうだなというふうに感じるので、私は、夢ということを前回お話したと思いますが、子どもは将来があり、私たちよりもずっと長く生きていくという存在だと思います。まず、生きていく上においてやはり子どもたちが夢を持ち続けられる、そういう方向に育ってもらえばすごくありがたく、うれしいなと思います。 それで、いろいろお話を聞いていて思うのは、私の経験を対象にして考えてはいけないのかもしれませんけども、何か大人に干渉されることは、子どもは結構嫌うんじゃないかなと思うんですね。ですから、遊べる場所をつくったから、そこへ行って遊んでということに対して、子どもはわりと、そこに行って遊ぶというのは少ないと感じます。 　それから、ちょっと間違っているかもしれませんけれども、今、親御さんがお子さんに対してあまりにもいろいろと制約をかけているんじゃないかなという気がすごく私にはします。こうしちゃいけない、ああしちゃいけない。何かそういう出口を塞いでいる行為が私は多いんじゃないか。だから、もう少し子どもたちを信じてあげる。その上でやはりきちっと子どもたちを見守ってあげるというこ

	とが何かすごく大切、大人として大切なんじゃないかなというふうに私は思います。そういう中で、子どもにどうやって夢を語ったり、抱いてもらえるようにしたらいいのかなってすごく感じます。
高橋委員長	ありがとうございました。私のほうも前回から今日までということでいろいろ考えてきました。で、佐野委員が言った話ではないんですが、なかなかやっぱり３つの中から一つに絞るというのは難しい部分もあるのかなと。ただ、やっぱり一つに絞ってアンケートをして、リーフレットをつくっていくということをしないと、視点がはっきりしなくなる可能性もありますので、一つに絞らなきゃいけないのかなと思っています。やっぱりどれもみんな関連していますので、どの切り口でアンケート調査して、成果物としてまとめるかということになるのかなと思うんです。 私はそういうふうに考えたときに、皆さんの意見を聞きながら、お話し申し上げると、子どもの居場所というところが、小金井市という特色も考えたときに、非常に研究する価値があるものなのではないのかなというふうに思います。 例えば先ほど小山委員から言われた話とか、佐野委員が言われた話で夢を持ち続ける、自分らしく生きるっていうことについても、元に子どもの居場所というものがあって、その居場所の形態というのは様々なものがあるのかなと思うんですが、学校の中でなかなか力を発揮できないお子さんが、例えば学校以外の居場所のところで力を発揮したり、学校でなかなか友達とうまく係われない子どもが別の場所で、別の友達とうまく係わったりという、まあ、子どもの可能性をさらに広げる、そういうものを子どもの居場所って秘めているのかな。そうすると、例えば、ほかの地区の実践なんかを見たときに、放課後、もくしは休日の体験活動を通して自分がやりたかったことが見つかって、自分の夢を持つことができたとか、もしくは勉強が苦手だったんだけど、放課後の学習で勉強のコツを教えてもらって、少しずつわかるようになって、学校も楽しくなったなんていうものも出ています。いろんなものがあるのかなと思うんですね。そういう点でいうと、子どもの居場所というのが、子どもの夢、子どもに夢を持って生きていくことですとか、子どもを見守る、大人が子どもを見守りながら、でも、大人と子どもがしっかりかかわっていくと、そういうふうなことも可能かな、というふうに思いました。そういう意味で、私は、子どもの居場所がいいのかなと思いました。 では、今、皆さんから一通り意見をお伺いしたんですが、一通り皆さんの意見を聞いてみて、何かご意見ありますか。先ほど羽田委員が言われた将来の夢の作文を書けない子がいるという話も、ああ、そうなんだろうなと思いまして、ただ、その子がなぜ書けないのかなと、私は教育の立場なものですから、考えたときに、自分の自信のなさなのか、それとも体験不足でなかなかほかの物事を知らなくて書けないのか。そういう子どもがさまざまな体験ができるような居場所があると、また子どもの可能性が広がるのかななんていうことも思ったりはしますね。
小山委員	ほんとうに相互に関連しているんで、なかなかちょっと難しいものがありますけれども、すごく気になっているのは、自殺願望じゃないけども、ネットで、こ

	れもＳＮＳに関連するんですけども、比較的若い子が、どういうこれまでの生活の、人生の中でああいう形になったかというのはわからないんですけども、やっぱり夢とか、希望とか、関連するものがあるのかなという気がすごくしたんですね。実際に殺害された人より、さらに多くの問い合わせ、あの彼のところにあったという、そういう何か非常に人生が曖昧としちゃって、わからないような状況で自分がどうしていったらいいのかと、夢も持てないということだったんじゃないか。そこで、要するに、体験とかね、いろんな提供とか、いろんな支援という話にもなってくるんでしょうし、そこでやっぱり物質的だけじゃなくて、ほんとうに豊かに生きるというのはどういうことなのかなということが、さっきの今、居場所の中でいろんな経験とかする中で、他者を尊重する、他者の考え方も、自分も大事にしていくとかいったようなことを構築していくのかと、築いていくのかといったようなことを何かできないかなというのをちょっと感じました。 　ですから、先ほど自己実現とかってほんとうにその意味では難しくて、びしっびしっと区切ってアンケートというのはなかなか難しいかなと、相互に関連しながら、うまくという気がちょっといたします。
高橋委員長	そうですね。古源委員、どうぞ。
古源委員	先ほど高橋委員長のほうから、テーマを一つだけに絞ることと、あと、アンケート項目についてというお話があったんですけれども、今、皆さんのお話を伺っていて、前のリーフレットを見たんですけれども、２年に一遍の調査で、２６年７月の家庭の教育力についての質問の項目の中に、例えば、かっとなったときにそれを我慢できますかとか、感情のコントロールをしていますかとか、お家の人は子どもにこういうことを聞いていますか、こういうことを話しますかとか、そういった項目のものがありました。 　もう一つの前に２４年の５月の調査、これはまさしく自尊感情を聞いたものがあるんですね。学校で認められているかとか、家庭で認められているかとか、自分が大事な人だと思っていますかとかね、自分に可能性がありますかというようなことを調査しているようなんですね。そういうことを考えると、聞き方によって、ちょっとアンケートが重複しちゃうんじゃないかなという思いがあります。 　あと、もう一つは、家庭の教育力のリーフレットの中で、半面を使って、子どものインターネット利用と家庭での教育についてという項目があるんですね。２６年の段階でも既にこういうことが問題になっていますが、インターネット関連も日々、ＳＮＳとか、技術が進歩しておりますので、そういったことも絡みながら、アンケートをするのがいいかなと思います。 　黒須委員が先ほどおっしゃっていましたけれども、家に帰っても誰かとつながっていれば、子どもたちは家にいてもいいのかなというふうになると思いますので、人が集う、仲間と集まるということの意味なんかも子どもたちに聞いてみるのもいいかなと思いました。
高橋委員長	ありがとうございます。いいですか。 　今のアンケートの項目についても、話が出てきたのかなと思います。また、先

	ほどお聞きした中で、小山委員、櫻井委員、黒須委員のほうから、アンケート項目についての話もありましたので、今、古源委員が言われたようにＳＮＳですとか、それ以外に夢を持って生きるというようなことも、今回のテーマで居場所について質問するときのその質問項目で絡めていくというようなことでいければいいのかなと思ったのですが、どうでしょうか。
佐野委員	関連しているので質問項目の中に取り入れていける内容じゃないかなと思います。大人の問題ですね。（笑）
高橋委員長	わかりました。
古源委員	そういう意味では、このどういうテーマであれ、リーフレットができたときにいかに活用していただくかというところが必要なのかなというふうに、それこそね、大澤委員もおっしゃっていましたけれども、お家で話題づくりをするとかね、そういったことを、お家の人にも啓発していくというような、何かそういう、うまく周知していく方法があればいいなと思います。
佐野委員	大いに活用したほうがいいかもしれませんね。耳が痛いことがたくさん書いてありますけれども。そのとおりだと思います。
高橋委員長	そうですね。
黒須委員	東京都はね、ずっと心の東京革命というこれで、大人が変われば子どもも変わるという、これをテーマにしてきたなって、まさに佐野委員の言うとおりと思いました。
高橋委員長	では、テーマについて話を戻したいんですが、先ほど皆さんのお話を聞いて、子どもの居場所ということに軸を置いて、その中で今、ご意見のあったような項目を、質問項目の中で落としていくというような方向性でよろしいでしょうか。
	（「異議なし」の声あり）
高橋委員長	はい。ありがとうございました。それでは、テーマは「子どもの居場所」に決定させていただきます。 では、続きまして２つ目の議題ですが、アンケート項目の内容、リーフレットでどう展開していきたいかということについて、話をしたいと思います。 アンケートについては、前回の委員会でも事務局から説明がありましたが、今までが保護者と子どもに同じ質問をぶつけて差を見るアンケート手法というのをとっていたようです。それから質問の数ですが、２０問程度ということで、啓発効果を含めて、ジャンル分けしてとっていたと。そうすると、ジャンル分けして質問をとっていくと、後でリーフレットにするときに、こちらが整理をしやすい、まとめやすいというような効果があったということです。質問項目についても、たくさん考えなきゃいけないことがあるので、整理していかなきゃいけないんですが、まず、どんなことを質問したいかについて、今までの協議の中でも出ていたんですが、皆さん、また話をしていきたいと思います。事務局のほうから何か補足がありますでしょうか。

田中児童青少年係長	そうしましたら、前回どのような形でアンケートをとらせていただいたか、見本として前回のアンケート用紙をお配りさせていただきます。これは小学生用のものでございますけれども、同じものを保護者の方にもお配りしまして差をみる部分もございました。文面については４択で、質問数は２４問ということになります。ごらんいただければわかるとおりＡ４のマークシートですので、２４問でもかなり文字は細かい形になります。そのあたりも考えていただいて、アンケートの設問をお考えいただければと思ってございます。あまり質問数が多くなると、お子さんも答えづらいですし、結果として設問の後ろの方への回答が適当になってしまったりしますので、そこもお考えいただければ、というところでございます。
高橋委員長	これが前回の地域力に関するアンケートですね。これは項目で分かれて、その中で１問、２問、項目別にある程度、分かれていますね。
田中児童青少年係長	はい。項目別に分かれたものを、さらに聞きやすい順番に組みかえた形になっております。
高橋委員長	なるほど。じゃあ、ちょっとこれを皆さん見ていただいて、ご質問もあるでしょうか。
小山委員	小学生は４年生と６年生にアンケートを実施したということですか。
田中児童青少年係長	はい。前回アンケートは、ごらんいただきましたとおり、小学校４年生、小学校６年生で、中学校が全学年という形になっておりまして、２校に対して各一クラスずつということで行っております。
高橋委員長	小学校２校、中学校２校、で、各一クラスずつということですね。全部の学校ではなく、抽出された学校ということになります。
小山委員	中学生の居場所で、黒須委員からご紹介のあった緑中の放課後カフェ、これは全校各市内の中学校、同じような……。
黒須委員	緑中だけですね。
小山委員	あ、緑中だけですか。
黒須委員	はい。小金井でやっているのは緑中だけで。
小山委員	これは保護者というより、地域の方がそういうカフェを展開しているんですか。
黒須委員	もともと親父の会の会員の人、それから、ＰＴＡが関わって、学校側のほうからも、部活をしてない子たちの居場所がないので、という話もあったみたいで、ちょうどタイミングが合ってできたと聞いています。でも、やっぱり学校で飲み物を出すというところが、ちょっと最初のクリアしなければならないネックだったみたいですけれど、茶道部とかはお菓子とお茶は出るし、みたいな、何かそういう感覚でスタートできたのかなと。ちょっとその辺のいきさつは、私は詳しくはわからないですけども。今、冬はココアとか、夏だとスポーツドリンクとか、２種類ぐらいずつ用意していています。

小山委員	それにかかわっている方、どのくらいいらっしゃるの、例えば主任児童委員さんとか地域の町会は。
黒須委員	いや、町会の人はいないですね。卒業生の親とかがほとんどです。現役世代のお母様方、親もちょっとかかわっているんですけど、名簿への登録はいっぱいあるみたいで、学校がこの日はいいですよって言われた日にできる人をエントリーして、この日は私、できますみたい感じで、で、その人が担当してやるみたいな感じで４時から６時まであけています。
小山委員	それはどういう教室を使っているんですか。
黒須委員	進路指導室、今はそこの部屋しかないようです。名前は何かくつろげない雰囲気の部屋ですけれど、その部屋しかないみたいでお借りしてやっています。遊び道具とか道具一式はＰＴＡ室に置かせてもらって、そこから部屋に運んできて、準備は全部大人がやる。子どもたちは好きなものを飲んでカップは洗って帰る、それがルールになっています。
小山委員	それはいつごろから始まったの？
黒須委員	すいません。たしか三、四年前ですね。
小山委員	あ、そうですか。私、知らなかった。地元が緑中だけど、全然知らなかった。
佐野委員	今の話、発想の転換じゃないけど、すごくいいと思うんです。何かいろいろやっている学校の方の事情もあるとは思いますが。余剰教室があるなら使って、子どもたちと交流するようなことを聞いたことがあるような気がします。高齢者と触れ合う機会がない子どもたち、小学校での取り組みとしてですが、そういう交流がなされているところもあります。
高橋委員長	それはアンケートの結果があって、そこからこの委員会の中で導き出した内容に対して、活用の工夫もあるんじゃないか、みたいなものが、リーフレットの中の提案のひとつとして出せればいい、という位置づけですかね。
佐野委員	そうですね。
高橋委員長	居場所ということで、私もちょっと、今回３つのテーマ、それぞれ調べてきたんですけど、居場所の定義については、実は文科省が出しているものがあります。そこでは、児童生徒が存在感を実感することができ、精神的に安定していることができる場所と定義している。子どもが存在感を実感することができて、なおかつ精神的に安定できる場所ということなので、つまり、物理的な居場所はもちろんなんですけど、それ以外に心理的な意味です。心の居場所という機能も果たすものだよ、ということを文科省は言っているのかなと思いました。居場所ということ、居場所の視点でアンケートの項目を考えるということになってくると、その辺は押さえておいたほうがいいと思いました。 　その他、例えば今の子どもたちの時代というのをまず確認する必要がある。そのうえで、実態について保護者、子どもが何を希望しているのか。その聞き方の部分でいうと、じゃあ、居場所といっても、放課後だったら放課後で時間的な部分の質問ですね。何時から何時に使っていますかとか、何時ごろ使いたいですか

	とか。内容的なものも、どんなことをやりたいか、どんなことをやっているか。実態と、それから、求めるもの、曜日なんかもまたあるかもしれないですね、月曜日から金曜日、何曜日使っていますか、とか、何かそういうこともアンケートの項目で聞いていけるかな。その中で、先ほどあった夢の実現、ＳＮＳとか、そういったものに触れていくことができるかなと、今、話を聞いてざっくり考えてみました。いかがでしょうか。 　それと事務局、今日は具体的な質問内容というか、項目ぐらいまで、ここで出るといいんですか。
田中児童青少年係長	そうですね。なるべく多くのご発言をいただければ、次回までに事務局のほうである程度のたたき台をご用意して、というようなお話もできるかと思います。
高橋委員長	わかりました。今後のスケジュールでいきますと、今日が第２回です。で、今日の委員会の中で質問項目についての意見をできるだけいただいて、それを受けて、事務局のほうで第３回の委員会でたたき案をつくってきていただけるということになります。そのたたき案を第３回の中で、また皆さんでもんで、もんだものを修正して、今度は全体会ですか。全体会のほうで提案するという。全体会はいつごろになりますか。
田中児童青少年係長	全体会は３月の末になります。
高橋委員長	そういうスケジュールになっているということです。他に事務局への確認はありますか。
羽田委員	確認ですけど、対象は小中学生ということになるんですか。
高橋委員長	対象は、これと同じということになりますかね、小中学生と保護者？
田中児童青少年係長	はい。配布先が基本的に市内の小中学校になりますので、アンケートを実施する場合にも、やはり同じ小中学校のほうがよいだろうということでございます。
大澤委員	小学校は低学年と高学年にしない理由はあるんですか。この間は４年生と６年生になっているんですけど、たまたま４年生と６年生だけであって、別に１年生とかでも構わないということなんですか。
田中児童青少年係長	前回までの流れでいきますと、基本的に４年生に満たないと、アンケートの内容を正確に把握させて回答させるということが相当厳しいだろうということでご意見がございまして、４年生と６年生になっていると記憶してございます。
大澤委員	はい、ありがとうございます。
高橋委員長	今のアンケートなんですけど、学校のほうでも国ですとか、東京都が各種調査をやっていまして、子どもの意識調査もとるんですけど、やっぱり５年生から上の学年が多いですね。でも、本校なんかだと４年生もちょっと意識調査をやっていて、今、事務局が言ったように、それより下の学年になると、ちょっとなかなか難しい部分はあるなという気がしますね。

佐野委員	ちょっと質問でよろしいでしょうか。中学生は１年から３年までやっているんですけど、小学生の場合は５年生がなくて、何か理由――理由というか、４、５、６じゃなくて、４年と６年、中学生は１年から３年までやるってなっているんですけど。
田中児童青少年係長	特段理由があるとは伺ってございません。ただ、予算上、アンケート対象自体にちょっと限りがございますので、はい。
佐野委員長	予算上の問題で総数がある程度決まっているということですね。
黒須委員	なるべく多くの学校で、なるべく多くの子にアンケートに答えてもらって、親にも答えてもらって、答えた人は、ああ、ほかの人はこういうふうに考えているんだ、というのをわかってもらうのが大事ですよね。他人が回答したことに対しては無関心というかね、スルーしちゃうんですけど、自分が回答したことに対しては、ほんとうに身近な問題というふうに考えると思うので、なるべく多くの人にアンケートが実施できたら、親の意識が変わっていくかな、という思いがあるのでと思ったんですけど、予算があるんですよね。
佐野委員	すごく大事なことですよね。この辺のところは少しアップできないですか、予算が……。(笑)
高橋委員長	そういう点でいうと、私、学校の立場でいうと、小学校で言えば、小４と小６ということで、うまく発達段階を押さえて対象学年を絞っているなという気がします。これ、小５と小６だとやっぱり近いので、小４と小６となったほうが年齢の幅がある程度ありますので、その発達段階に応じた傾向がわかりやすいのかなという気がしますね。あと、中学校が３学年になっている、中学生は思春期のど真ん中ですから、１年生、２年生、３年生で全然状況が違いますからね。そういう意味でいうと、前回まで、この学年にしたというのは、まあ、よく考えられているのかなという気はしています。 まあ、今回のアンケートについては、いろいろな諸事情もあるので、この学年を対象にということでよろしいでしょうか。
黒須委員	いや、でも、あと、５年生を増やすというのは予算的に無理ですかね。(笑) 私も子供会で実態調査みたいなのを皆さん、各子供会にアンケートを書いてもらって、それでそれを資料にして、みんなで情報交換しましょう、みたいなことでやったことがあるんですけど、毎年同じ行事をやっているからということで、去年の担当の人のアンケートを受け継いで持ってきてくださいというと、話し合いにならないんですね。自分で書いてないから、全然、目を通してなかったり、ほんとうに無関心で、その場には集まるんですけど。同じ内容を書くにしても、自分が書くと、あ、ほかのところはこんなふうにやっているのかとかという、それが全然意識が違ってくるので、一クラスでもいいので増やしてもらえたら、いいなと思います。
田中児童青少年係長	事務局のほうからよろしいですか。今回予定されている数量からいきますと、正直申し上げますと、前回の数量を超えるというのはなかなか難しいものがござ

	います。ただ、今、見本としてお配りした前回のアンケート用紙と全く同じ様式の用紙をもう一回使う、設問数を変えない、ということであれば、前回２年前にアンケートをとったときの用紙の残が若干数ありますので、その分を足して何とか、ぎりぎりもう一学年増やすくらいは賄えないこともないか、と考えてございます。
黒須委員	この用紙を使うということですか。マークシートの残があるということですか。
田中児童青少年係長	そうです。そう多くはありませんが、この用紙自体の白紙の残が若干数あるので、それを今回購入する分と合わせて使えば、予備用紙がほとんどなくなりますけれど、何とかもう一学年、２クラス分を足した数まで補えるのではないかと。ただ、そうすると、アンケート項目が学年別・男女別で１０項目になっているんですけど、ここが６学年×２クラスで１２項目になってしまうので、男女別の振り方などの細かい項目が変わってきてしまうので、聞ける質問数が一つ減ってしまうとか、そういう影響は若干出てくるかと思います。 例えば今の仕分けが小４男子・小４女子のような形になっているので、学年だけにすると、男女別をとるために質問項目を１つぶさなきゃいけなくなってしまう。もしくは、そもそも男女別自体を外してしまう、いうようなことでのご選択をいただくとは思います。
古源委員	アンケートでは男女別にとっていますけど、リーフレットに男女別でデータが出ているものが一つもないので、そこは何かあるでしょうか。別のデータで男女別というのを報告書とかにまとめられているのであれば、別ですけれども、少なくともこのリーフレットでは学年別データになっているように思います。
田中児童青少年係長	男女別につきましては、以前お配りしました活動報告の後ろのほうにございます、実施結果というところでのみ、一応反映されている形になります。で、具体的には、アンケートをとる際に男女の差があるかどうかの確認という意味でとっているだけですので、今回は必要ないということであれば、その形で大丈夫かと考えます。
高橋委員長	そのアンケートの質問内容というよりも、対象学年、対象のその性別とか、そういうところの今、話になっていますが、皆さんどうでしょうか。男子・女子別々でとるか、それとも学年で一くくりにしてとるかということなのかなと思いますが。
古源委員	先ほどのお話だと、男女別にしなければ４年生から中３までのデータが６学年とれるという理解でよろしいですか。
高橋委員長	事務局のほう、いかがですか。
田中児童青少年係長	はい。そのような形になります。前回のものに対して、男女別が消えて、小５が増えるということになります。
佐野委員	委員長は学校現場にいらっしゃるので、こういう場合、男女別を外すのはどうでしょうか。

高橋委員長	そうですね。東京都や全国の調査関係、学力調査では必ず意識調査をやっていて、男女別で集計はしますが、考察するときは男女別ではなくて、学年で、こういう傾向がある、中２はこういう傾向があるという形で、男女別は出していないです。学年だけなら学年だけでもいいのかなと私は思います。ただ、今まで男女別でやってきているので、男女別でやってきた意味もあるのかな、その辺のところがちょっと私もよくわからなかったものですから。
伏見児童青少年課長	すいません。今のご意見も踏まえて、例えば設問の項目の１番に男子か女子かというような形の選択肢をとるような形をとれば、対応はできるかと思いますので、あとは、質問項目が多いようであれば、あとから削除するかどうかを検討いただくという対応もできるのではないか、事務局側としてのお答えとさせていただきます。まずは、質問項目がどれぐらいあるのかということで、ご議論をいただければと思います。
高橋委員長	はい、それでは、時間もないので質問項目に移りたいと思います。どうぞ、皆さんご意見いただければと思います。
古源委員	帰宅したときにお家に誰かいますか。
高橋委員長	はい。今みたいな具体的もので構いませんので、皆さん、意見を出していただければありがたいです。
大澤委員	サッカーや野球などの課外活動をやっていますか、放課後どこかに行くことがありますか。
小山委員	実態をつかむため、新たに何か始めているかを聞くということですか。
大澤委員	いえ、放課後の時間の過ごし方といいますか、結局家にずっといるだけではなくて、部活動をやっていたりとか、サッカーとかに行っているんで、放課後にいろんな形で外に出られてますか、という意味合いなんですけれども。他者とのかかわりがありますかという主旨で。
高橋委員長	そんな形で具体的なものをたくさん出していただければ、事務局のほうで整理をしていただいて、例えばジャンル分けをして、これは実態、これは希望とか、そういう整理をしていただきますので、その整理をするためにたくさん出たほうが多分、事務局のほうも作業がしやすいんじゃないかなと思いますので、思いついたことで構わないと思いますので。
羽田委員	主にどこにいますか。
高橋委員長	ああ、なるほどね。
櫻井委員	帰宅後、塾や習い物を幾つぐらいしていますか。今、とにかく暇がないという子が多いので。
高橋委員長	あー、うーん。

小山委員	帰宅後の過ごし方を自分でどう思っているか。満足しているのか、充実しているのか。不満があるのか。
高橋委員長	そうですね。正直なところで、知りたいところですよね、それは。
古源委員	放課後に誰と過ごしたいですか。
佐野委員	何でも話せる友達がいますか。
櫻井委員	親との会話は１日どれくらいありますか。孫を見ていると父親とは土日でないと日常は会話もないんじゃないかなと思います。遅いし、朝はもう早いし。
佐野委員	朝食を食べていますか。
黒須委員	一日、どれくらいネットを使っていますか。
高橋委員長	放課後ですから、ぜひ聞きたい。
櫻井委員	帰宅後、どのくらいゲームをしていますか。
小山委員	夕食をきちんと摂っていますか。
古源委員	あと、誰と摂っているか。孤食とか、いろいろありますよね。
大澤委員	そう、そこが問題。
小山委員	スナック菓子とかね、そういうものしか食べていないとか。それは保護された子の事例だけど。
高橋委員長	ありますよね、そういうケースもね。
櫻井委員	普段から買い物にひとりで行ってますか、とか、スーパーでたまに一人で駄菓子を買っている小学生を見るものですから。親からお金をもらって一人で買っている姿を、うーんと思うんです。好きなものを選んでいますけど、それでいいのかどうか。
古源委員	お金を渡されて御飯を食べなって言われていても、お菓子を買ってたりね、そういう感じの子ね、たまにいますよね。
大澤委員	それこそ児童館とか、公共の場に行っていますか。
高橋委員長	あ、そうですね。
櫻井委員	図書館とか公民館も、ですね。
佐野委員	子どもサイドから見た質問、何か考えないといけないですかね。
高橋委員長	子どもサイドからいうと、子どもの居場所ですから、どんな居場所があればいいかって、すごくシンプルですけど……。（笑）
黒須委員	理想の居場所ですか。
高橋委員長	何をやっていきたいか、とかですね。
小山委員	今の活動が楽しいか。
佐野委員	勉強は楽しいか。（笑）

櫻井委員	放課後の居場所、ということですし。
佐野委員	学校帰りね。（笑）
高橋委員長	外遊びはしていますかとか、社会貢献、ボランティアをしていますか、とか。
佐野委員	児童館は何時までやってほしいか。少し遅くまでいたいとか。公民館はたしか５時ですよね。子どもはね。
櫻井委員	冬場と夏場とか場所で違うんじゃないですかね。
大澤委員	図書館は５時に放送が流れますよね。
佐野委員	さっきご意見が出ましたけれども、公民館で夕方、子どもはよくゲームをやっていますよね。
小山委員	つい最近、テレビで見ましたけど、プロゲーマーっているんですよね。仕事として、もう何千万とか何億とかっていう賞金を得る人もいるみたいです。東大かなんか出て仕事を始めたらしいですけど、だから、そんな人もいるから、それが職業になりつつあるわけで。
高橋委員長	設問とか、先ほどのテーマのところで話し合ったときに出ていた黒須委員から上がってきた、時間の使い方についての質問、あと、それこそテーマに出てきた、自分らしく生きる、主体的に生きるというところに関係する部分の質問としては何かありますかね。時間の使い方とか。
佐野委員	朝起きる時間をちょっと聞いてもらいたいなと。時間の使い方そのものは難しいかと思いますね。それと、ＬＩＮＥについて、使っていますか。聞き方がまずいですかね。
黒須委員	スマホを持っているかどうか、というのはどうでしょうか。
佐野委員	あ、そうかそうか。それがないとだめですね。
高橋委員長	ＬＩＮＥですとか、さっきも出ていましたけど、ＳＮＳで、１日、放課後ＳＮＳをどれくらいやりますか、ＬＩＮＥどれくらいやりますかなんていう質問はできるかもしれないです。そうすると、すごい時間が出てくるのも想像がつきますけど。
小山委員	表現はちょっと難しいけれど、自分のしたいことができているか。自分らしく生きるということも絡むけど。
高橋委員長	それこそゲームで言えば、隠れてどこかでこそこそゲームをやるんではなくて、それこそどこかの場所を借りて、ちゃんと講師の人が来て、ゲームプロですとか、それこそプログラミングの教室とか、そういうふうな形にすれば、子どもの居場所にはなるわけですよね。親もどこへ行っているかわかるし、子どもたちも自分の好きなことを、いろんなことを学んでいって、そこで自分は、あ、こういう才能があったんだ、これ、楽しいななんていう夢を持って主体的に生きるというところにつながっていったりなんかして。いいことしか言っていませんけど。
小山委員	例えば将棋の藤井聡太さんがそういう感じですよね。小学校のうちから能力を見出せれば、ああいう世界もある。周りの気づきもあるかもしれない。

佐野委員	校長先生がいらっしゃるので、こういうことを言っていいかどうかわからないですけど、何とか選手権とかいうのを公にぱっとやって、何か子どもたちが……。（笑）要するに表に出したいよというか。ええ。
高橋委員長	おっしゃるように、居場所というところでいうと、確かに子どもたちが何かをやって、それを披露する場とか、活躍する場というのがないと、子どもたちのモチベーションも上がりませんので、そういう意味でいうと、何々選手権があるということは、やっぱりその選手権の項目が好きな子どもにとってみれば、それはもうほんとうに憧れの舞台なんで、そのために努力をするだろうし、そのためにそこの場所に通うだろうしということで、そういうことはできないことはないんじゃないかという気がしますね。 皆さんご意見ありますか。事務局のほうに伺いたいんですが、とりあえず今、ぱっと出していただいたんですが、いかがでしょう。とりあえず大丈夫ですか。
伏見課長	はい。大丈夫です。はい、ありがとうございます。
高橋委員長	ありがとうございました。じゃあ、皆さん、ご意見を出していただきまして、ありがとうございました。今、いただいたご意見を参考にして、事務局のほうで次回までに質問項目のたたき台をつくっていただくことになりますので、また皆さんで協議をしていただければと思っております。次回は２月２日の金曜日でよろしいですか。
田中児童青少年係長	はい。事務局としてはアンケート案のたたき台をつくるのに、若干お時間を頂戴できればと思ってございまして、できれば２月２日でお願いしたいと思います。なお、２月２日に再度ご議論いただいて案を完成し、それを３月の本体会議で専門委員長からご報告いただくわけですが、現状３月２７日から３０日の間のどこかになると予定してございますので、次回までにはそちらの詳細もご報告できるものと思ってございます。
高橋委員長	わかりました。じゃあ、次回は２月２日ということになります。 では、先ほども言いましたが、次回の会議当日までに事務局のほうでこの審議内容に基づいたたたき台を作成していただくということで、皆さんよろしいでしょうか。
	（「はい」の声あり）
高橋委員長	はい、ありがとうございました。 では、これをもちまして、第２回の専門委員会を閉会させていただきます。ありがとうございました。